

地域に始まる持続可能性への途 — 伝統文化の再定義で明日を拓く —

対談 小林新也 [合同会社シーラカンス食堂代表]

× 前田章雄 [大阪ガスネットワーク㈱エネルギー文化研究所研究員]



都市部における持続可能な消費生活を考える際に、忘れてならないのが、地域とそこでの生産^{II}ものづくりだろう。そんななか、存続さえ危ぶまれる伝統産業にリブランディングで新たな命を与え、さらに経済循環の起点とすべく、独自の試みを続けるのが兵庫県小野市の「シーラカンス食堂」だ。本対談では代表であるデザイナーの小林新也氏をお迎えし、都市一極集中により後継者や資金不足に悩む地域のものづくりを、持続可能性への『挑戦の場』に変える意識・行動について、前田章雄研究員が深く、幅広い視点から問いかける。

脇坂敦史 II 構成 Ayami II 撮影

あらゆる分野の後継者不足が 地域経済の持続性を危うくする

小林 私はもともと各地の伝統産業振興の一助になりたいという思いから、大阪の大学へ進んでプロダクトデザインの勉強をしたんですね。それが在学中、島根県で古民家のリノベーションに関わって組子細工^{*1}の職人さんや瓦屋さんと知り合い、瀬戸内国際芸術祭^{*2}への出展にたずさわって香川県の豊島^{てしま}で漁師さんと

交流するなか、日本中あらゆるジャンルの伝統産業が途絶えかけているのを目の当たりにし、故郷である兵庫県小野市の現状を考えざるを得なくなった。そうした経緯で「シーラカンス食堂」^{*3}を立ち上げたわけです。

実際、職人仕事はどこも後継者の問題を抱え、豊島の漁師さんは私に漁船を譲るとまで言うほどでした。そこで、自分の地元にもそろばんをつくる人たちがいたことを思い出し、早速お話を伺うことにしたんです。意外だったのは、そ

ろばんは今でも一定の数が売れており、その意味で継続は可能だったこと。それでも深刻なのは、やはり後継者不足でした。そろばんづくりというのは完全な分業制をとっているため、たとえば玉を削ったり、仕上げたりという工程のごく一部でも後継者が不足すると、全体の持続性が危うくなってしまふのです。

前田 和傘づくりなどを見てもわかるように^{*4}、日本の伝統的なものづくりには完全分業で地域全体の繁栄を担うやり方がありました。

しかし現代では分業化がさらにグローバル化し、世界のどこかで製造された部品が世界中を飛び回り、世界のどこかで組み立てられ、先進国に供給されている。現代社会の縮図が地域の伝統産業から読みとれる、とも言えますね。

小林 このままだと、関わる人たちがすべてが共倒れになってしまう。そうならないために、長期的にはひとつの工房や会社を集約して人を育てることが必要でした。ただ、理想的な産業のあり方を机上で「デザイン」することはできても、すぐには変わらない。まずはビジョンを共有し、できることから徐々に実践していくしかないのです。

そこで取り組んだのは、産地がもつそろばんのイメージを変えることでした。「播州^{はなづか}そろばん」は伝統的工芸品にも指定され、重厚な「工芸品としての計算機」のイメージで売っていました。でも私から見るとそろばんは、もはや計算機ではなく教育用品です。卒業時にそろばん塾の先生が生徒に贈る記念品をイメージしてそろばん玉を使った時計をデザインしたり、教育産業を意識したカラフルな総合カタログをつくったりしました。あわせて、展示会ブースのイメージも同じコンセプトで一新したのです。

前田 電卓が登場するまで、そろばんは経済のあらゆる面で当たり前の存在だっただけに、「計算するための道具」という表面的な部分だけが強調され、「よみ、かき、そろばん」という言葉が示すような「教育文化」としての側面

が忘れられてしまっていたのでしようね。地場産業の抱えている矛盾を俯瞰的に見て、実践につなげていったところが素晴らしい。そろばんそのものではなく、つくり手自身のイメージを変えたというお話にも感銘を受けました。

洗練を極めた握り鉄と出会い ものづくりの文化を考える

前田 「播州刃物」のブランド化も興味深いですね。刃物づくりが盛んとは知っていましたが、小林さんのお仕事を拝見したことで、この地にこれほどの刃物職人がおられたのをあらためて発見しました。

小林 ここで育った私も、ぼんやりとしか知りませんでした。それほど目立たない産業だったのです。「播州そろばん」が話題となりテレビなどで取り上げられた頃、業者さんの組合から新しい鉄をデザインしてくれという依頼をいただきました。でも、その依頼はいったん忘れることにしたんです。この業界は今どんな問題を抱え、何に困って私に声をかけてくれたのか？まず、それを知ろうとしたわけです。

鍛冶屋の場合、それぞれの職人が握り鉄、裁ち鉄、剪定鉄といった具合に専門を特化する形で分業が進んでいます。なかでも握り鉄をつくる水池長^{みずい}弥^やさんという職人さんとの出会いに、衝撃を受けました。熱した鉄の棒を叩いて一かち鉄の形をつくる「総火造り鍛造^{たうぞう}」というのですが、使用感はもとよりメンテナンス性を考え

ても洗練しつくされていて、無駄がなく美しいフォルムをしているのです。

前田 デザイナーである小林さんの目から見ても、洗練を極めた形だったんですね。そういうものを、昔ながらの技法で職人さんがつくっていた？

小林 これより美しい握り鉄を想像するのは不可能です。しかも総火造り鍛造で握り鉄をつくっているのは、この地域で水池さんひとり。だから水池さんは日本中から、さまざまな分野のプロたちが寄せる特別の依頼に応えているのですが、年齢も70歳を超え、弟子を育てることは諦めていた。これが途絶えたら、日本の歴史あるものづくりの生態系が崩れてしまうのではないか。そんな危機感を抱きました。

前田 伝統産業に限らず、日本中のものづくりの現場で起きている後継者不足が、「持続可能な社会」を考えるうえで非常に大きな意味をもつことに気づかされます。しかも、それが一番難しい課題でもある。

小林 その通りです。そこで私が提案したのは、新しい刃物のデザインではなく、「播州刃物」という地域ブランドをつくることでした。水池さんをはじめ優れた鍛冶屋さんがつくる刃物は、どれも非常に安い値段がついている。それらを集めブランド化することで、全体の価値を上げていく必要があったのです。まず考えたのは、ブランドのメインビジュアルです。「播州刃物とは」をどう視覚化するか？



上/そろばんをモチーフに、新たな視点でデザインされた時計や知育玩具。下/海外での人気も高い「富士山ナイフ」は、富士山と三保の松原がモチーフ。パッケージ(写真上部)にも和紙を思わせるこだわりが。



●MUJUN
BANSHU HAMONO
VARIOUS KINDS OF JAPANESE BLADED TOOLS

Over 250 years ago, the blade making industry in the region known as Banshu (Southwest Hyogo in Japan) is said to have started with katana forging. Over the years, blade making industry has developed as the demand shifted from weapons to daily tools such as shaving blades and scissors. Today, the Banshu Hamono represents the traditional craftsmanship of Banshu, producing a variety of handmade, high quality bladed tools for professionals and consumers.



小林氏がデザインした海外向けのカタログの一頁。単なる商品の羅列ではなく、バイヤーのイメージを喚起する細かな配慮がなされている。写真提供/シーラカンズ食堂



小林氏の実家に併設されたシーラカンズ食堂のオフィス兼工房。オフィス1階は刃物の鍛造のための工房に充てられ、若い職人が日々腕を磨いている。

前田 カタログでは鉄や剃刀、包丁、ナイフ、鎌といった刃物を並べ、その用途をわかりやすくシンプルにビジュアルで表現されています。こうして並べることで、初めて「播州刃物」の価値が見える形になった。海外を強く意識したブランディングでもありますよね。

小林 ほかに、パッケージを見直したり、ホームページをつくったり、存在さえなかった商品リストをつくったりして、ブランドの体裁を整えました。ただ日本だけを舞台にしていたら、たとえば1000円で売られた商品をいきなり1万円にするのは難しい。ということ、海外のまったく新しい舞台で始めたかったのです。2013年に東京で開催された国際見本市「インテリアライフスタイル」に出展したのも、それを足がかりにヨーロッパを目指したからで、幸いフランスのバイヤーが気に入って

同年のパリ・デザインウィークで開催された「Japan Best」への出展が決まりました。

前田 海外で認められることで、日本人もその価値を知る。考えさせられるお話ですが、日本文化を海外に発信するうえで、特に意識されたことはありますか？

小林 日本の刃物文化は、「研いで使う」ということがセット。それも、西洋刃物のようにグラインダーを使う研ぎ方ではなく、刃がダメになっってしまうのです。だから海外の展示会では必ず、砥石と水を使って鋼を冷やしながら研ぐ日本流のやり方を教えるワークショップを開くのですが、熱心な参加者がとても多い。モノだけではない、文化全体を知る必要があると直感的に理解しているのでしょうか。こういうメンテナンスの価値を高めていく努力は、日本でも続けていく必要があると強く感じています。

所の中に自ら工房を開き、若い職人を受け入れることにしたのです。

前田 従来の弟子入りとは違う、まったく新しい人材育成のやり方ですね。どうして、そんなことを考えるようになったのですか？

「ドの再構築」は、まさにこの「ニューロッド」である、と感じました。むやみに新しいものをつくろうとするのではなく、元からある価値を見極め、現代に合う形でプロデュースする。存続の危機にある「播州刃物」の場合、リブランディングの成果は後継者の育成につながっていったのでしょうか？

小林 展示会でも大きな反響があり、広くメディアにも取り上げられるようになりました。海外から弟子入りの希望者が来たりして、後継者育成を諦めていた職人さんたちの意識も変わりました。そして、水池さんをはじめ何人かの職人のもとで、実際に若い人たちが修業を始めたのです。でも、これまでと同じ、師匠と弟子がじっくり時間をかけるやり方で後継者育成を行うには遅すぎたのでしょうか。ある時、盆栽鉢の職人さんが認知症で仕事を辞めたのをきっかけに、考え方を改めました。私のデザイン事務

小林 職人が後継者を育てるのは、お金を稼ぐためでも、楽をするためでもありません。「一人前に育てられるか」が唯一の判断基準。責任をもって育てられるか、いつも悩んでいるんです。高齢の職人さんが「もう自分では責任を負えない」と言うので、「じゃあ、教えるだけならいいの？」と聞いてみました。責任は工房を起ち上げた私が負い給料を払うから、技術を教えてくださると頼んだら、皆さん「いいよ」と言ってくれたんです。もちろん「苦肉の策」ではあります。最初の1年は雑用だけ、といった伝統的な技の伝承にも意味がある。でも、それにこだわってはいられない状況でした。

前田 職人を育てながら、彼らが今、稼ぐための仕組みもつくる。小林さんのすごいところだと感じます。実は、私も日頃から鉛筆を削るのに愛用させていただいて、折られたたみの「富士山ナイフ」。これは職人の育成を目的として小林さんがデザインした、「技術を磨きながら稼げる商品」なんですよ。

小林 その通りです。でも、そういうナイフづくりは月に何丁まで、と決めています。そして残りの時間を、複数の職人から新しい技術を学ぶために充ててもらおう。結果として、私たちの

**従来の「弟子入り」とは違う
新しい職人育成の試み**

前田 「手入れ」の文化も、持続可能性を高める重要なポイントですよ。私はエネルギー・インフラをめぐる歴史や文化から、次世代につながる新たな視点を探るべく研究しているのですが、そのなかで new と old を合わせた造語「ニューロッド (newrod)」という考え方を提唱しています。もちろん、ただの懐古趣味ではありません。古いものには必ず複数の本質的な価値がありますが、私たちは往々そのなかのひとつだけに注目した効率化に集中するあまり、他の価値を忘れてしまう。それを掘り起こしていくべきではないか、という考え方です。

小林さんが「播州そろばん」や「播州刃物」で実践されている「リブランディング(ブラン

工房で働きはじめた職人のひとりとは数年の間にめきめき腕を上げ、途絶えていた盆栽鉢を復活させるところまで到達しました。

**「里山再生」によって目指す
人づくり、拠点づくり**

前田 小林さんたちの活動はものづくりの再生という次元を超え、今や人づくりや拠点づくりへとつながっています。かつてタタラ場「5」があったという、島根県大田市温泉津町で新しい「村づくり」にも取り組んでおられます。「持続可能な社会をつくる」という観点から、そうした挑戦はどんな意味をもつのでしょうか？

小林 これまで「地場産業の営業」をしながら、どこか罪悪感を抱いていました。というのも、私たちが使う材料や燃料はどこから来たのだろうか？と考えると、やはり昔ながらの日本のものづくりとは違う。「これは100%播州産」と胸を張って言えないのです。そこで、なんとか材料や燃料を自給化できないかと考えました。近所で鋼をつくれなにかと場所を探したこともありました。どうしてもイメージが湧かなかったんです。

そもそも鍛冶屋が存続しづらいのは、お金を稼げないという問題だけでなく、本質的に都市化され持続可能性の弱まった環境で昔ながらの仕事が続けることの矛盾に直面しているからではないか？ コロナ禍で、それが正しいと確信しました。そんな考えから、完全自給のものづく



小林氏が中心となり、島根県大田市温泉津町で始まった里山づくりの試み。タタラ場に近いこの場所から、持続可能な地域への第一歩が始まる。写真提供/シーラカンス食堂

くりと職人育成を目指し、2020年夏から温泉津町で里山再生のプロジェクトに着手したわけです。

前田 コロナ禍によって、グローバルなサプライチェーンから材料も燃料も調達し、同じ規格の製品を大量につくって売る、ということの限界が露わになりました。それにしても、ラディカルで意欲的なチャレンジですね。

小林 今は小野市と温泉津を往復しながらの二拠点生活ですが、徐々に島根での比重が高まっています。田んぼを再生しての米づくりをはじめ、新たに製材木工所もつくっている。刳殻や藁、端材を用いた薪、それらを燃やした灰などは鍛冶屋にとって、すべて資材として貴重なんです。暮らしたもののづくりを分けるべきではない、それを日々感じながら仕事をしています。

温泉津自体が過疎地域なので、日本の未来を見るような感覚もあります。それを持続可能に

なものづくりが継続できないという危機感もあります。でも、それらが同時にできれば、地場産業は本当の意味でのブランディングが可能になり、ものすごい価値を生むと確信しているんです。とはいえ、里山を再生し、職人を育てるのは時間もかかるので、その間にはニッチなものづくりをしながらお金を稼ぎ、生活と仕事のバランスをとっていく。理想を掲げながら、そんな「ほどよき」をデザインすることも今は大切なことと思っています。

これは以前から感じていましたが、教育において重要なのは学校だけでなく、何より家族や地域のなかで学ぶ「一般教養」です。日本はそれが極端に弱くなっている。だからモノについても、値段が単に高いか安いかわという基準でし

するために、とにかく人がいる。なんとか若者を引き込み、関係人口から増やそうと、製材所の廃材を使い温泉街にギャラリーと物販の「時」、カフェの「津」、フィンランド式サウナの「風」を備えた交流施設「時津風」というのをつくったり、固定観念を捨ててあらゆることを試しています。そしていよいよ数年内に、小野市で技術を学んだ若い女性の鍛冶職人が移住することになりました。

前田 お話を聞いてみると、私も島根へ行き何かお手伝いしたくなります。分業化された仕事ではない、トータルなものづくりができ、しかも生活と仕事の間に調和がある。そういう人づくり、拠点づくりを目指している。小林さんがつくろうとしている里山文化は、まさに「ニユールド」なものと感じます。

小林 私も単純に昔に戻りたいとは思っていませんし、実際に日本人が忘れかけ、消えかけているなかにすごくいいものがある。それをなんとかしたいんですね。最終的にはこれからの時代に合った、ハイブリッドなものに向かっていくのだと思っています。

持続可能性の原点は地域や家族のなかで学ぶこと

前田 ひとつの枠に収まらない小林さんの活動ですが、同時にやはりデザイナーとしての強い矜持も感じます。あらためてご自身の役割は何か、そして「デザイン」とはどんな行為か、お

か選べません。そんな社会では、文化もアートも生まれてこないでしょう。

前田 価値観は地域により、人により違う。それが当たり前なのに、効率化された貨幣経済のなかで見失ってしまったのでしょうか。そこにも、小林さんが地方や里山にこだわって活動を続けている理由があると感じました。

小林 温泉津という場所に惹かれているのは、地域に根ざした文化や教養が残っており、それをよくしていくことができる感じるからです。ほかの地域の「手本」になっていけそうな、実に可能性に満ちた場所です。将来は、海外からもたくさん人を呼び、新しい文化を興していきたいと思います。

前田 私たちはローカルなものの大切さを知り

考えをお聞かせください。

小林 デザインの定義は多面的ですが、その本質は「価値の再定義」だと思います。たとえば私の同世代やもっと若い人に、過去の忘れられた古い文化や価値をきっかけよく見せる。ただ、デザインという言葉もそうですが、日本は頭で考えることに偏重しすぎだと感じます。「とにかくやってみる」というフットワークの軽さが足りない。やりながら考えるというのが、本来のデザインだと思っています。

前田 一方、ものづくりの現場、企業、そして消費者としての個人に加え、特に地方では自治体の存在が大きな意味をもっています。複数のプレーヤーをつなぐ行政の役割については、どうお考えでしょうか？

小林 すごく重要です。でも何かをやらうとするとき、モノを買ったり、仕事を発注したりするための補助金はあっても、人を育てるのに使える補助金があまりにも少ない。企業活動ではなく、人を育てるための仕組みがもっと欲しいですね。

前田 重要なのは広い意味の教育、「人づくり」ということですね。小林さんは、どのような人材を育てようとしているのでしょうか？

小林 鍛冶屋で言うなら「自由鍛造」という、鉄の棒から日常で使うどんな道具もつくれる、いわば昔の「野鍛冶」です。もっと言えば、砂鉄から鋼をつくることからできるような人を育てたい。もちろん、これまで話してきたよう

ながら、広域なネットワークを活用する効率性や利便性に依存してきました。でも、ふたつの間に着地点を見つけないのは難しい。小林さんのお話を伺い、あらためて発想の原点を徹底してローカルなところに置いてみる重要性に気づきました。それができて初めて、足りないものは外から、ということが意味をもってくる。モノづくりにとどまらず、人づくりに注目することで、地域内の循環を中心に据えた「持続可能な社会」にも、より明確なイメージが湧いてきました。ありがとうございます。

注

- *1 細い木片を釘を使わずに組み合わせ、緻密な幾何学的模様を生み出す木工の伝統技法。多く日本家屋の欄間や障子に使われる。
- *2 瀬戸内海の島々（岡山県・香川県）を舞台に2010年から3年ごとに開催されている「大アートイベント」。
- *3 2011年設立。ブランディングとデザイン（プロダクト・グラフィック・空間）を主軸に、伝統産業をはじめ先人のものづくりに新たな生命を吹き込む活動を行っている。
- *4 和傘づくりは、骨、柄、表面に貼る紙など、すべての部品を専門の職人が担当。最終的にこれを集めて組み立てられる。そばも同様に玉や枠、ひこなど、各部が分業により製造される。
- *5 砂鉄を高熱で溶かし、鋼を製鉄する古来の「たたら製鉄」が行われていた場所。

小林新也 (こばやし・しんや)

デザイナー、合同会社シーラカンス食堂代表。1987年、兵庫県生まれ。大阪芸術大学デザイン学科卒業。2011年、地元の小野市にシーラカンス食堂を設立。「播州そば」や「播州刃物」、「石州瓦」などのブランディングから商品開発を通じ、地域財産を世界市場へ向け「伝える」ことに注力した販路開拓に取り組んでいる。2021年島根県大田市温泉津町に合同会社里山インストアを設立し代表を務める。

前田章雄 (まえだ・あきお)

大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所研究員。1991年大阪ガス(株)入社後、産業用エネルギー部門で主に工業炉の営業、企画設計、メンテナンスに従事。2019年よりCELにて都市インフラの研究に従事する。